

博士論文要旨及び学位論文審査結果要旨

保健医療学研究科保健医療学専攻 博士後期課程 看護学分野 学籍番号：2216001 氏 名：生天目 禎子		学 位 授 与 年 月 日	令和6年 3月 12日
		博士論文受理年月日	令和5年 12月 8日
		論文審査終了年月日	令和6年 2月 20日
博士論文名	高齢者の生活の場における支援の構造に関する研究 ー地域と特別養護老人ホームで生活する高齢者に焦点をあててー		
論 文 要 旨	[研究目的] 認知症は高齢になるほどに罹患者数が増加する傾向にあり、施設、地域も含めた高齢者の生活の場における支援が求められている。認知症高齢者の生活支援を円滑に進めるためには、まず、地域で生活する様々な状況にある高齢者を理解すること、さらに、認知症を病や障害と理解し、本人の意思が大切にされる社会を築くこと、介護職員と看護職員の協働・連携が重要である。 本研究は、高齢者施設の中でも入所者が最も多く、9割以上が認知症高齢者である特別養護老人ホーム(以下、特養)の看護職員、介護職員という職種の違いによる認知症高齢者への横断的な生活支援の構造と課題を明らかにすることを目的とし、4つの調査を実施した結果をまとめたものである。 [研究の概要] 研究1では将来、看護師となり認知症ケアを担っていく看護学生を対象として、老年看護学実習において看護学生が印象に残った認知症高齢者との関わりと認知症高齢者からかけられた言葉を明らかにすることを目的とし、課題レポートをテキストマイニングで分析した。その結果、学生にとって認知症高齢者との関わりの中で、短いながらもかけられた言葉は記憶に残り、励みや自己の関わりを省みる機会、関わりの手がかりになっていたことが明らかになった。 研究2では高齢期に配偶者と死別しひとり暮らしになってから食を通した交流に参加している男性の後期高齢者6人を対象に、食を通した交流に参加したきっかけと継続していくプロセスを明らかにすることを目的とし、質的に調査した。その結果、高齢期に配偶者との死別したひとり暮らしの男性高齢者は死別による悲嘆感情を抱いていたが、食を通した交流へ参加を続けることで食事と人の温もりは悲嘆からの回復につながり、ひとりの生活を支える一助となることが示唆された。 研究3では特養の認知症高齢者の生活支援におけるリーダー介護職員として役割を遂行するプロセスに焦点をあてて明らかにすることを目的とし、リーダー介護職員10名を対象として質的に調査した。その結果、認知症高齢者への生活支援について、1人の介護職員としての日常の生活支援とリーダー介護職員としてのケア管理のプロセスがあり、これらは介護職員としての責任や苦慮していることの間で悩みながら実践されていたことが明らかになった。 研究4では特養の認知症高齢者の生活支援における看護職員として役割を遂行するプロセスに焦点をあてて明らかにすることを目的とし、看護職員9名に質的に調査した。その結果、介護保険施設という新しい組織での看護を受け入れ、そこで必要な知識を学びながら、施設の看護職員として踏み出し、認知症高齢者が安心して暮らしができるように他職種との連携によるケアの遂行のプロセスが明らかになった。 これらの4つの調査結果より、介護職員、看護職員ともに特養へ入所した認知症高齢者が心安らぐ施設生活を送るために、本人の尊厳や意思を尊重することで関係性を築くことを根底とし、生活を支援していたことが明らかになった。		

論文要旨	本研究は、介護職員の仕事に対して社会的にきつい、大変というマイナスのイメージより、魅力を示すことができた貴重な知見である。経験を積まずに早期に離職する介護職員が多い中で、リーダー介護職員の専門性や役割を明らかにできたことは、経験が浅い職員介護職員の励みとなり、職務継続やリーダー介護職員への支援および教育体制の調整の一助に貢献できると考える。また、特養の認知症高齢者の生活支援の質を保証するためには看護職員の役割が重要であることも示せた。リーダー介護職員は、常に通常の介護業務を担いながら管理職業務も担うという業務負担が大きい可能性がある。経験を積んだリーダー介護職員は、看護職員からの医療的な視点での意見を求めている。看取りケアや医療的なニーズを持っている認知症高齢者の生活支援においては、看護職員の支援が介リーダー介護職員の精神的な安定や介護の質の保証へつながっていることを示せたことは、新たな知見である。介護職員も看護職員と同様に、適切な教育を基盤に就業を継続することで知識や経験が集積され、能力を高めていく職種であると推測されるため、介護の質を保証する上でリーダー介護職員は重要な役割を担い、リーダー介護職員の精神的な健康を保ち、やりがいを感じながら職務継続するうえで看護職員の支援が必要となると考える。
学位論文審査結果要旨	主査：看護学分野 教授 安保寛明 副査：看護学分野 教授 菅原京子 副査：作業療法学分野教授 佐藤寿晃 【新規性・有効性】 当該分野において、高齢者が生活を営む場の一つである特別養護老人ホームの専門職である介護職と看護職は協働や連携が必要である。そのため、両職種がとらえる支援の構造を比較可能な形で分析することの重要性が高い。この研究では、介護職と看護職への質的分析を平行して行う研究をおこなっており、先行研究の乏しい手法であり新規性が高い。 また、この研究では、看護学生が高齢者と接した経験に関する質的分析と一人暮らしを営む高齢者の交流の質的分析を先に行っているため、援助者への理解や援助を受ける高齢者への理解が十分に深まった状態で、介護職と看護職へのインタビューデータが分析された。その結果、介護職には「安心できる居場所づくり」看護職には「安心した暮らしへの関わり」といった安心感を重視する点で共通性が存在すること、介護職は「看取りへの心残り」が存在する一方で看護職は「看取りに安堵」のカテゴリが存在するなど職種による援助場面での視点の特徴も明らかとなった。このように、特別養護老人ホームではたらく両職種のケアのプロセスが比較可能性を保った状態で分析されており、職種連携の発展をもたらす研究成果を得たという意味で有効性が高い。 【信頼性】 この研究では、特別養護老人ホームではたらく介護職と看護職のそれぞれに対してインタビュー調査を行い、質的に分析している。予備的に行われた研究も含めて、ほぼすべてのデータの分析過程において共同研究者とともに複数の視点から分析が行われ、葛藤などの多義的要素を含めたインタビューデータが明瞭に概念化されている。また、先述の通り看護学生への調査や高齢者への調査を分析して理解を深めたうえで主要なデータを分析している点でも、語りの解釈に関する飛躍が生じにくく、信頼性の高い研究過程であったと考えられる。 【総評】 この研究では、特別養護老人ホームではたらく介護職と看護職が認識するケアの構造について質的調査を通じて分析し、介護職と看護職には安心感の重視などの共通性が存在すること、介護と看護には各役割を認識し遂行する個別のプロセスが存在することを明らかにした。高齢者への看護と介護の発展と協働の過程を一定以上明らかにし、当該分野の発展に貢献する研究である。 審査委員は、論文構成、背景の整理と問題設定、結果および考察、引用文献の適切性について慎重に検証し、博士論文として適切な水準に至っていることを確認した。また、口頭試問の際にも研究者自身が未知と既知を整理して論述した。本論文は博士論文に値する内容であると評価し、一致して学位論文審査及び最終試験に合格と判断した。